

「絆」 完結記念! LSD & TOURNIQUET 年末年始スペシャル反省会

人類滅亡の危機とさえいわれた2013年もついに終わろうとしている12月31日、都内某所。夜景の見える創作和食店のこの一室は、華やかなオーラと髪色に満ちていた。そう、今年「絆」本編を終えたばかりのLSDとTOURNIQUETのメンバーが一堂に会しているのだ。

「絆」が完結し、TOURNIQUETの復活ライブ、LSDも久々のツアーと続き、今年は大忙しだった彼ら。何かと接点の多いこのふたつのバンドだが、こうして全員でゆっくりと顔をつきあわせるのは、筆者が知る限り初めてのことだ。

単にドラマチックという言葉で片付けられるにはあまりに重すぎる……まさに「波瀾万丈」な人生だった両バンド。今回はほぼプライベートともいえる合同忘年会に潜入し、完結した「絆」のことや今年を振り返ってもらった。さらには特別にファンからのインタビューにもバンバン答えてもらうぞ！ 彼らを追い掛け続けた筆者だからこそ実現した、本誌独占インタビュー！ いざ、開宴！

「はいはい、じゃあ始めましょうか」

薫がぱんぱんと手を叩くと、部屋のざわめきが静まった。ステージでは決して見ることでできない貴重なオフの薫だ。「みんな飲み物渡ったかな」なんて見回している姿は、何だか現実味が無い。「ありまーす」などと方々から返ってくる声もまた実に和やかだ。かつての彼らからは想像しがたい光景かもしれない。だがこの光景こそが、筆者にとってもよくなじみのある、彼らの素の姿なのだ。

「それじゃあ、乾杯の挨拶は、利くんにお願いしようか」

拍手が起ると、ええ、と顔を擧めて、利が薫を睨んだ。

「よ！ 若様！」

桜が両手を口にあてて太い声を出す。やめると眉を吊り上げて笑い、利がグラスを持ちながら立ち上がった。今や両バンドのヴォーカルとなった利は、どちらのバンドにとってもリーダーではないが、やはりこの場の中心人物なのだ。もちろん、ステージ上で見せるあのクールな顔は封印している。彼もまた、本当は年相応の青年にすぎないのだ。「えー、お忙しい中お集まりいただき、ありがとうございます。今年はTOURNIQUETも復活し、LSDも活

動再開できて、やっとひと段落ということ、こうしてみんなが集まることができてすごい嬉しいです。……うん。すごいことだよ」

「泣くのは早えぞー」

桜の野次に、うるさい！ と利は顔の前で左手を振り下ろした。涙こそ流れてはいないが、やはり利の目は、少し潤んでいるように見えた。

「とにかく、無事にみんながこうして元気でいられることが、なんか奇跡に思えます！ 恭二はいないけど……でも元気にしてるみたいだし！ 色々ありましたけど、本当にお世話になりました。また来年もよろしくお願いします！」

というわけで、乾杯！」

乾杯、と太い声が湧く。

各々グラスを合わせ、遠くに座るメンバー同士も腕を伸ばしてグラスを合わせる。当然薫と紺のグラスは合わないし、汝緒は初めからグラスなど持たない。誰も彼にそんなことは期待しないので、全員勝手に汝緒のグラスにグラスをぶつけて乾杯を進める。みんな見かけによらず優しいので、隅っこに座っている筆者のグラスにも乾杯をしてくれた。

東京の夜景が一望できるこの店を選んだのは、LSDの哀だ。彼にこの企画を話したとき、「椅子より距離の近い

お座敷にしよう」と電話越しで嬉しそうに語っていたのが印象的だった。

そして今、LSDのメンバーとTOURNIQUETのメンバーがテーブルを挟み、向かい合って座っている。LSD側には、皓、哀、葵、薫と座り、いわゆる誕生日席に利がいる。そしてまた角の席に汝緒、紺、妖華、桜と続いている。ファンが見たら泣いて喜ぶ、豪華で派手な年の瀬だ。

「たぶん一時間くらいしたら陣たちも来るかなあ」

携帯を見ながら利が呟いた。

LSDとTOURNIQUET合同の忘年会に、さらに利の実家からは陣と直人が参加する予定だ。これは筆者にとっても愕きの、超異例、超特別である。ファンの中には知らない人はいないかもしれないが、利はとある良家(?)の一人息子で、その護衛(?)であるのが、陣、直人という男なのだ。先ほど名前の出た恭二という男も、その内の一人。まあ、細かいことはここでは書かない。あまり言うと、筆者が利に殴られてしまうのだ。

机に肘をつき、両手の指を組んで薫が仕切り直した。

「さて、今年「絆」が完結したということで、だいぶ大きな一年になったと思うんだけど」

薫は隣の利を見て、それから一同をぐるりと見まわした。「つうかなんでてめえが仕切ってたんだよ」

右膝を立てた紺が、薫を睨んだ。

「そりやお前、シリーズ主役の一人の特権だろ」

「絆じゃ目立ってなかったくせに」

「うるせえな。いいんだよ、主役の恋人なんだから」

「ツテメエ」

唇の端を吊り上げる薫を見て、紺が立ち上がる。紺にはれると怖いのだが、筆者はこういうやりとりを見ると、まさに、ケンカするほど仲が良い、なんて言葉を思い出す。

「まあまあ、ちよつと、とりあえず話を進めよう」

利が尻を浮かし、苦笑いをして両手を伸ばす。

「利、紺ちゃまの隣に行つてあげれば？」

葵がビールのジョッキを唇につけながら、紺の方を覗き込むようにした。

「いらねーよ！」

「認めん」

紺と薫が即答し、葵が鼻を鳴らして笑った。紺ちゃま紺ちゃまと桜が騒ぎ、哀がそれに乗って反芻する。

「いいじゃないたまには。あんたは毎日利を独占してるんだから」

「無理」

微笑む葵と真顔で却下する薫。紺は大きく舌打ちをして腰を下ろした。毎日利を独占、と聞けば、紺はおもしろいわけがない。

「利、ここおいでよ」

妖華が自分と紺との間を叩いて微笑む。利はそれを見ると途端に含み笑いになり、あからさまに嬉しそうな顔になる。このやりとりをファンに生でお見せできないのが悔しいところだ。

「えー、どうしよっかなあ」

「おいで。膝の上でもいいよ？」

「じゃあ妖華が膝の上がいいな」

言いながら利は膝で歩くようにして、紺を押しつけ妖華の隣に入った。傾いた紺は牙をむく。

「ふっざけんなよ邪魔くせえ」

「嬉しいくせに」

隣を外を向いた汝緒が咳き、笑いが起きる。アア？ と激昂して振り返る紺。なんだかんだ、利が紺の隣に入ったのだ。

「素直になれよ」

「素直になれ」

「素直になりなさいよ」

方々から届く声に、紺はますます顔をしかめる。

「は？ なんだコイツらバカじゃねえの。付き合つてらんねえ」

紺は冷めた顔で利に背を向け、頬杖をついてビールを飲んでる。長い髪から見える耳が赤い。このところTOU

RNIQUETを追い掛けてきた筆者には、紺がいかにか天邪鬼であるかがわかるようになった。

「つかおまえら手握り合うなよ、キモ！」

桜が妖華の膝を覗き込むようにして笑った。妖華も笑って、そして薫をちらりと見る。

「利と俺の愛は止められないよ。たとえ薫さんでも」

おお、とどよめきが起こる。その顔がかすかにはにんでいることに気づいた利が、むっとして妖華の頬に手をあて、視線を戻させた。利が妖華に一目惚れをして他のバンドから引き抜いたというのだから、しょうがない。

「なんで俺が怒られなきゃなんねえんだよ」

睨む利に、ため息を漏らして薫が咳く。すると暗が片眉を上げて薫を見た。

「妖華は利のお姫様、なんだろ。王子に王子はいらねえんだよ」

「まーな」

王子と呼ばれた薫は同じように眉をつり上げて、にやりとする。

「けっ、胸くそ悪い」

「臣下にももらえ」

紺が咳くと、汝緒が咳いた。本日彼が見せた、初めての笑みだ。

「おい、お前どっちの味方だ」

紺が汝緒の肩を掴んで揺する。いかにも面倒という顔をして、汝緒がますます外側を向いて鼻で嗤う。

「味方とか」

吐き捨てるような咳きに紺が舌打ちをして、ビールを飲んだ。利と妖華が笑いをこらえて頭を寄せ合っている。

「じゃあ紺はそのうち俺の臣下になるとして」

薫が再び、パン、と手を叩いた。文句を言う紺の声を無視して続ける。

「反省会、始めようか」

そういえば、まだ始まつてもいなかった。

●「お前の死ぬ発言怖い」(桜)

——それじゃあ、薫に代わって進行させて貰うけど、まず、利は「絆」が終わって率直な感想、どう？

利「無事に色々終わってよかった。なんか時間の流れが速かったよね。二、三年の間だったのにあっという間」

桜「実際は九年以上経ってるんだけどね(メニューのファイルを手しながら咳く。うわー、という苦笑いの声が続く)」

——そこ、突っ込んでじゃうんだ(笑)
哀「俺らほんとは幾つよ」

葵「それは言わないお約束よ」
皓「どうせ永遠の十七歳とか言いたいんだろ（ため息混じりに煙草の箱に人差し指を入れる）」
葵「ガキは嫌いよ。でもやつぱり二十四くらいで永遠に止まっていたいわね。妖華と利は十代で良さそうだけど」
桜「もう十代はいいですよ。俺たち超めんどくさかったっすから（苦笑いして後ろに両手をつく）」
利「たしかに（苦笑）」
葵「そうねえ、あんたたちほんと大変そうだったからね」
紺「……（無関心な顔でビールを飲む）」
桜「まさに若気の至りってやつですよ（肩をすくめる）」
利「そんなんじゃないわいわ！（怒り出して桜の腕を叩く）」
桜「いやそりゃそうだけどっ、ごめんごめん」
葵「ま、今でこそ、ってやつよね」
哀「ふと煙草を出し始める喫煙者たちを見て）やっぱり換気扇が真上にある部屋にしてって頼んだんだけど、正解だったなー（上向いて煙が吸い寄せられる排気口を見る）」
薫「ほお、そんな指定したんだ。すげえな」
利「哀ちゃんが予約したんだっけ？」
哀「そうー」
——セッティングはこつちでするからいい、って哀ちゃんに言われたのでお言葉に甘えてしまいました。

哀「仕事って考えてないから（笑）。いい機会だよ。近いうち全員で集まりたかったからね。で、店の人に言ってみたら、そういう部屋あるっていうからこの店にしたんだ。ほら、俺たちの大事なヴォーカルがね、いるからさ。（集まる視線に、居心地悪そうに眉を寄せて笑う利）」
利「もう遅いけどね、将来は副流煙による肺ガンで死ぬし（途端に灰皿に煙草を押し付け揉み消しす喫煙者たち。それに目を丸くして爆笑する利に、笑えない、と言う声が相次ぐ）」
——みんな極端だなあ（笑）。さりげなく汝緒と紺も消してるし……あ、すみません。（二人に睨まれる筆者）
桜「お前の死ぬ発言怖い」
薫「怖い」
哀「うん怖い」
利「いや待って大丈夫だから（笑）」
薫「逆にこつちがトラウマだよ」
——利のトラウマのせいで起きる事件がトラウマ。そういうことだね。

くわけないし」
利「うん当たり前だよ。妖華のために生きる！」
薫「俺がいる前でよくもまあ（半目で呟く）」
利「（幸せそうにビールを飲む）」
——利、全然聞いてないね（笑）。
薫「そういうヤツなんですよ」
哀「ていうか、前から気になってただけど、妖華と利ってどつちが受け？ 攻め？」
利「妖華」……！（真っ赤）
哀「受け同士？」
皓「（ははは）と隣の兄の頭を叩く弟」
哀「つてえー！ だつて気になるだろ？ この雑誌ってそういうのわかってる読者向けでしょ？」
利「ややや、よ、妖華とは、そんな、その（なぜか妖華に抱きつきながら首を振る）」
哀「可愛い何こいつら萌え」
葵「萌えー！」
薫「よくもまあ俺のいる前で」
——ステージの上では何でもできるほどトリップしちゃうのに、リアルな話になるとふたりとも意外と照れるよね。妖華はよく、「利とのセックス」って、趣味のところを書いてたじゃない。
妖華「そうだけど……だけど実際は、俺、利に手なんて出

せない（小声で）」
葵「どうして？」
妖華「利は、神々しいんです。俺の天使だから（一同、おーっと盛り上がる）」
利「……（気絶しかけている）」
桜「利、しっかりしろ（笑）」
薫「恥ずかしいのか嬉しいのか、わかんねえ……」
紺「さすがに恥ずかしすぎるだろ」
妖華「俺は本気だよ！」
紺「はいはい夢見る少女でいてくださいありがとございませす」
妖華「紺つてむかつく！」
紺「ありがとございませす」
利「ふう……（起き上がっておしぼりで額を拭く）」
桜「お、蘇った」
——妖華も利も顔赤いよ、いつもの余裕がない（笑）
哀「あーかわええわー」
葵「二人まとめてどっかに閉じ込めて飼っちゃいたいわね」
哀「いいねー！」
利「変態！」
桜「おいそこで何気同意してんじゃねえぞ」
紺「してねーよー！」
葵「紺も仲間に入れてあげるわよ。三人なら怖くないわ。

薫「なんて追っ払っちゃいましょ」
薫「てめえらこのバカどもが！」
葵・哀「きゃーこわーい」

桜「(店員が現れ料理の皿を受け取りながら)まー、紺はもう、一回経験してるから、監禁」

紺「……(ビールでむせる)」

利「さっさと言うな、さっさと」

桜「事実っしょー」

薫「ああ平和になったなあ(遠い目をする)」

汝緒「……。 (苦笑)」

利「紺も監禁されてみたら？ してあげようか？」

紺「……(動きが止まる)」

桜「お前今ちよっといいなとか思っただろ」

紺「思ってたええよ！ バカか！」

桜「照れんなってー。素直になれよー」

哀「なれよー」

葵「っていうかTOURNIQUET全員可愛いからみんなまとめて閉じ込めたいわぁ(両手を組む。全員怯む)」

● 汝緒人形には菜箸！？

葵「汝緒なんかさ、お人形さんみたいなのよ、ほんと！

シリーズ化してパッケージにしたいくらいだわ。TOURNIQUETシリーズ第一弾、汝緒！」

哀「いいねえ！」

皓「気の毒に。汝緒がタゲられた」

汝緒「……(いやーな顔をする)」

葵「ちなみに第二弾は紺ね！ いやーん絶対に欲しいわぁ」

哀「いいねえ！」

薫「……バンド界のおすぴー、盛り上がる」

哀「小物にはギターつけて、あとはなんだ、汝緒っぽいもの」

利「菜箸！」

葵「えー！」

哀「えー！」

全員「(汝緒以外、爆笑)」

哀「汝緒人形に菜箸ついてくるとか、それ超良い！」

利「紺は何がいいかなー。ナックルとかどうよ」

葵・哀「似合うー」

紺「使わねえよパーカ」

哀「素手ゴロカ(煙草を吸う)」

利「でもその辺にある物とか、とりあえず何でも使って相手ぶん殴るって感じじゃん」

哀「めちゃくちゃだなあ(笑)」

皓「……よく生き残ったな利」

利「ねー」

薫「ねー、じゃねえよ」

桜「紺は機敏な悪役レスラーって感じたな」

紺「意味わかんねえよ」

● 「すみませんでしたね」(紺)

——じゃあそろそろ、戻してもいいかな。

利「このメンバーだめだ、すぐ脱線する(笑)」

——協力して(笑)。

利「はい」

——利のその、はいってやつ、なんか信用できないんだよなあ……。

薫「わかる」

紺「わかる」

——お、同時(笑)

紺「(舌打ち)」

利「つか失礼だなあ」

薫「聞いてないだろって思うからな」

利「ひどー」

——で、さっき監禁の話が出たけど、その辺とか……触れても平気？

利「んー……(すごく眉間を寄せて腕を組む)」

桜「利次第だろ？ 俺たちも十分辛い話だけどお……」

薫「まあ、これが雑誌になったときに読むのは特殊な読者だっつんだから、今さら隠しても無駄だけど」

利「まあいいかなあ。うん。昔の話だからね。反省会なんだから、反省しようぜ(笑)」

紺「すみませんでしたね(なげやり)」

汝緒「……ひでえな(笑)」

利「紺にマジで謝罪されたらそれはそれで引くし」

哀「利は優しいなあ」

葵「ほんとね」

薫「それじゃ困んだよ」

妖華「ごめんなさい(頭を下げる)」

利「なぜ妖華が(笑)」

桜「双子としてだな(笑)」

——双子といえは、金髪時代を思い出すね。

利「懐かしいなあ。そこまで昔の話じゃないのに」

妖華「切っちゃったのも紺のせいだからね(紺を睨む)」

桜「うわー紺居つれえ(全員笑)」

葵「元悪役(笑)」

紺「うるせえ。一生悪役で結構だよ」

葵「かわいいー」

紺「なんでだよー」

——黒髪の利のことは、TOURNIメンバーはずいぶん後で知ったんだよね。

桜「そう。あれはシヨックだった。汝緒とか固まってただろ」

汝緒「……別に」

桜「嘘つけえ。顔面蒼白ってのはああいうこと言うんだぜ」
汝緒「うるせえよ(苦笑)」

——今日は汝緒は苦笑いしかできない日だね(笑)

利「口数少ないからインタビュウになりにくいね、大変だね(笑)」

汝緒「大きなお世話だ」

妖華「でも本当に、あのときは、終わってたって、思った(寂しそうに)」

桜「利が消える、とか何とか言ってたね、お前」

利「消えない消えない、消さないで(笑)」

紺「消えかけたたる直後に(巻き舌)」

利「え？ いや、う、そうか……」

薫「お前も反省しろー」

利「ひーごめんさい……」

汝緒「……(無言で煙草を吸い続ける)」

利「……(黙る)」

葵「妙な空気になるわね、やっぱり(笑)」

哀「かるーく反省する人生じゃないから(笑)。直視した

くありません！ ていう過去だから(笑)。だいたい今でこそこうだけど、俺あん時一生こいつら許さないって思ってたからね(汝緒と紺を見て)」

葵「皓が止めなげや殴ってたわよアンタ(笑)」
利「え！ そんなだったの！」

皓「そんなだったそんなだった(頷く)」

——利が病院に担ぎ込まれたときだね。桜と妖華だけがその場にいなかったんだよね。

桜「そう。最悪だよ。少し後に知った」

薫「たまたま俺が知ってた連絡先が汝緒だけだったからな。少し落ち着いてから、汝緒が桜たちに連絡入れたんだろ？」

汝緒「(頷く)」

桜「それももう利が処置終えてからでさ……」

妖華「もう、頭真つ白になった……(声が震える)」

利「だめだ、妖華ちゃん、この話NGだった」

——そうだね、ごめん。妖華は倒れちゃったんだよね。

利「うん。妖華、ごめん(妖華を抱きしめて涙を拭きながら)」

桜「俺ら悔しかったんだよ。悲しいけど、悔しかったね。

俺たちつてどうも脇役でさ、悲愴だと全然出てきやしない(笑)。いつつも、何が起きてんだ！？ ってなってる。

あの日も、どうしてずっと一緒にいたはずの利のことを後で知らなげやいけないんだって感じで」

薫「何気一番苦労してんの、桜だよな(苦笑)。確かに、という声が続く)」

桜「そうなんすよー。苦労してんすよー。もうサッパリ。わけわかんない。ずーっとそんな感じだったなあ……」

——最後まで普通でいられた人、っていうイメージだね。

桜「でしよー？ もう労って下さいよーみんなー(笑)。方々からお疲れ様ですという声が飛ぶ)」

妖華「でも最後らへんは桜も頭が変になってた」

桜「なるだろーありやー」

利「……うちのバンドって一体」

紺「どうしようもねえな」

汝緒「……主にお前がな」

利「お前がな」

全員「お前がな」

紺「待てよ！ 汝緒、テメエ！ 裏切りやがったな！」

汝緒「(笑)」

葵「……仲が良いわねえ」

●「お前らなんでそんなに生き急ぐんだよって、
こいつら全員を見ていて思ってた」(皓)

——まだ利から感想を貰っただけなんだよね。あとでまた

個別のロングインタビューもさせてもらおうかと思ってるんだけど、他のメンバーにも率直な感想を聞かせてもらいたいかな。

桜「じゃあ時計回りで、皓から」

皓「感想ねえ……」

哀「なさそー(笑)」

皓「ない」

薫「寡黙なのがなくて困ったもんだよ」

皓「ペラペラ喋る男のほろがみつともねえ」

葵「あら何？ やる気？」

皓「めんどくさいことになった……(葵から目を逸らす)」

哀「たぶん俺も皓も、そんな関わってないからね、ファンはそんなに印象ないんだと思うよ」

利「だって二人の世界じゃん(笑)」

哀「そうかな？」

薫「そうだろ」

哀「お前らには言われたくないぞ！ 俺の前で俺の利ちゃんとイチャイチャしてー！」

薫「してねーしお前のじゃねーし圧倒的にお前らのほうが

二人の世界だし」

葵「兄弟はイチャイチャしても仲良しだねって言われて

終わるものねえ(料理を運んできた店員にワインを注文す

る)」

哀「とにかくー。印象が薄いのはしょうがないとして、俺らももちろん、だいぶ辛かったんだぜ？」

葵「そんなこと言わなくて誰だってわかってるわよ」
薫「ていうかまだお前には聞いてねえ(笑)。皓が関わると思うししゃり出てくる」

哀「……べつにそんなんじゃない！(慌てておしほりてテーブルを拭き始める哀に、一同笑)」

皓(苦笑)

哀「ほら、とつと感想言っとけよ」

皓「感想つってもなあ……(首筋を掻く)。ああ、慌たしなかった、って感じか」

桜「気持ちわかるけどもつと具体的に！(笑)」

——たとえば、印象に残っているシーンとか。

皓「印象？ そうだなあ……(考える)、ああ、利がやたら脚の骨折って大変そうだったなあ、という……」

利「それー？(全員笑)」

汝緒「落ち着きがねえんだよ」

葵「まあっ！ 今すぐく愛を感じたわよ！」

汝緒「いや、別に(苦笑)」

利「え、ないの？」

汝緒「……お前なあ(ため息を漏らす)」

薫「良い良い。今日は許す。(腕を組んで目を閉じる。全員笑)」

皓「真面目な話、俺みたいな基本傍観者タイプは、流れについていけないんだよ。知らない間にどんどん利が突っ走って行って、向こうっかわでグレネードにぶつかるか地雷踏むんでドカーンってなってる、あーあ……って」

利「あーあ、て！(笑)」

哀「ていうかお前なんでもゲームっぽく言うなよ」

皓(笑)「だってマジでそういう感じだったから」

——じゃあ傍観者だった分、別の辛さがあったのかな。

皓「そうだろうね。やるせないっていうか、お前らなんてそんなに生き急ぐんだよって、ここにいる全員を見ていて思ってた」

——皓は静かにみんなを見守ってたんだね。

皓「そんな大層なものではございません(笑)」

桜「偉大ななあ、さすがドラマー(笑)」

利「全体を見て、すべてを包み込む感じね！」

薫「皓は一人で哲学しちゃった感じ(笑)。冷静に状況を把握してる。ステージでもそんな感じだから、コイツがないと困る」

利「でもLSDはみんな落ち着いてるじゃん」

葵「そつでもないわよ。アタシと哀が好き勝手やれるのは、皓と薫が裏で調整してくれてるからよ」

桜「さすがはリズム隊だなあ……つちも見習わなきゃなあ、なあ妖華くん？(と、妖華の方を向く)」

妖華「ん？(笑顔でストローを啜えている)」

桜「うーん……あんつま、支える系じゃないよなあ、お前……」

利「うちのベースは、護ってやんなきゃダメだから」
紺「照れてんじやねえよアホ(はにかむ利を見て)」

●「悲しいけどもキレなくあるべき、愉しいけどもちゃーんとあんのー」(哀)

——それじゃあ、哀は？

薫「ほらお前の番だよ、喋っていいよ(笑)」

哀「うるせえ(笑)。……んー、俺は皓と違って、思い切り感情振り回されてたからねー。けどさっきも皓が言ったみたいに、ちょっと離れたところで知らない間にいるんなことが起きていて、息つく暇もないままいるんなことがあって、一生懸命把握したいし解決したいって思うんだけど、感情型なもんだから空回りしちゃって……」

薫「今も空回り気味で喋っちゃってますが(笑)」

哀「うるへえ薫！(笑)。……冷静になれなくて上手くやれないだろ。辛かった。桜じゃないけど、何が起きてるんだよ！ っつて、もーわけわからなかったね」

葵「みーんなわけわからなかったわよ(煙を吐く)」

利「冷静な汝緒さんだってそうでしょ？(ビールを飲みながら)」

汝緒「……まあ」

薫「汝緒が取り乱したところなんか見た日にゃ崇られる」

桜「わかられてるなあ(笑)」

紺「あっはっはっは！(手を叩く)」

汝緒「どういう……(苦笑)」

利「……(会話を感動した様子で聞いている)」

哀「確か、TOURNIに初めて出逢って最初に声かけたのって俺なんだ。利をナンパした(笑)」

——えーと、二十一話かな。

利「え！ そんなデータあんの！(と筆者の手元のファイドルを覗き込む)」

薫「この辺の話、嫌なんだよなあ……」

哀「なんで？」

利「このときのこと、覚えてないんだよこの人。鈴音さんで頭いっぱいだったから」

薫「ほらな(嫌そうに)」

紺「そのまま忘れてりゃよかったのに(ぼそりと呟く)」

葵「あああ、また可愛いこと言っちゃってえ(テーブルに両腕を置いて紺を覗き込む)」

紺「ふん。(顔を逸らす。可愛いという声が飛ぶ)うるせえ黙れ！ ビールもってこい！(襖に向かって)」

汝緒「お前もう酔ってんだろ……」

紺「酔ってねえよ」

哀「でもね、薫のそれはともかく、(笑)忘れちゃだめなのは、愉しかったことも沢山あったよってこと！ 悲しいこともキリなくあるけど(笑)、出逢ったときのこととか、ライヴやったとか、みんなでなんもしないで喋って終わったとか、愉しいこともちゃんとおんの！」

葵「そうよ。悲しいことばかり数えちゃダメ。よかったことに目を向けないと、前に進めないのよ」

——人間、どうも辛いことばかりに目がいきがちになるからね。では次、葵、そのままお願いします。

●「喜怒哀楽、ぜんぶ貴方とあるのよ、ダーリン」 (葵)

葵「哀と皓、桜と妖華だけじゃないのよ。所詮アタシも傍観者。でも愉しかったのよ、ほんと。良いじゃない、人生は舞台のようなもの、ってかの方もおっしやるでしょ？(煙草を吸う)」

哀「かの方ね(笑)」

利「シャンソンの。紫の大先輩」

妖華「紫の大先輩(笑)」

皓「天草四郎」

桜「女形たちが見事に全員反応した(笑)」

皓「え」

桜「わかっている違う違う、皓以外(笑)」

利「だからさあ、女形じゃないったら(ふくれる)」

葵「金髪時代じゃそう言われても仕方ないわよ、観念なさい」

利「なんかなあ……(まだふくれている)」

葵「アタシはこう見えても平凡に育ってるのよ。そんな波乱に満ちた人生ってわけじゃない。薫もごくごく普通の家庭に育ったし、ただちよっとグレしちゃっただけでね」

薫「グレたつもりはない(笑)」

葵「あなたは器用にグレたのよ。上手いこと大人の目をすり抜けてきただけで。薫と出逢ったから、んまー面白い人生になったわ。喜怒哀楽、ぜんぶ貴方とあるのよ、ダーリン(薫の頸に指を添える。薫、首を引いてはいはいと笑う)」

紺「怖……(ものすごく小さい声で)」

葵「なんか言った！(ものすごい早さで)」

紺「……(目を逸らして煙草を啜る)」

薫「まあー、お前には散々付き合わせたから……怪我まですせて」

利「ほんと、もう、なんて言っているのか……(俯く)」

葵「やーね、何度も言わせないでちょうだい、あなたたち

のせいじゃないのよ。これはあたしの人生の課題なの、わかる？ 神があたしに架した試練なの！ 十字架なのよ！

(手を組む)」

薫「すぐそうやってミュージカルにする。しかも試練と十字架ってなんか意味違くなえか？」

葵「いいじゃないのよ(笑)」

——葵は印象に残ったシーンとかある？

葵「あたしねえ、だいつ好きなのよ、利が拳銃をこめかみに当てるシーン。(あー、と同意の声が聞こえる)」

利「こらーお前らー！ 辛かったのにー！」

——五十三話かな。

葵「そう！ 今だからこそ言える、ってヤツよ！(笑)薫だって絶対に好きはず！ ていうかここにいる奴らみんなわかるはずよ、そういう趣味の集まりですもの！(全員笑)」

薫「……そりゃあ、まあ……いろんなこと置いておいたら、ねえ？(笑)」

哀「美しいなあ」

利「確かに趣味云々で行けば、趣味だけとさあ(和牛ステーキをつまむ)」

葵「まーた、あのとときの陣さんときたらー！」

哀「いいよねー！」

葵「もーっ、そおーよ、陣さんよ陣さん！ アタシにとっ

てはベストオブ「絆」よー！」

利「主役だからね(嬉しそうにもぐもぐしている)」

桜「お前もっつかお前が主役だろ」

紺「悲劇のヒロインですから(肉食べる)」

利「お前が言うなお前が！」

——で、つまり、葵にとっては、「絆」は陣さんだったというわけでいいのかな(笑)。

葵「そうね。言うなれば陣さんと利の人生劇場ね(きっぱりと)」

薫「どこまでも自分排除しててすごいわ、逆に」

利「本当に傍観者として楽しんでたんじゃないのって思える(笑)」

葵「楽しまなきゃ損よ！ とくに「悲愴」「絆」なんてものはアンタ、楽しまなきゃ何が残るっていうの。損ばっかじゃないの(鼻で笑う)」

皓「実は一番頭にきているのがこいつだったりしてな……」

薫「ありうる……」

●「ベースらしく一歩後で利くんを支えようじゃなごの、と」(薫)

——じゃあ、次は薫だね。薫もシリーズ主役なわけけど、

完結してどうだった？

薫「そうだねえ。紺に言われたとおり、絆では主役のポジションを一つ下りたところ、っていうスタンスでいたからな。ちよっと後に引きましたよ、と(笑)。ベースらしく一歩後で利くんを支えようじゃないの、と。ま、どうやっても俺では力になれないっていうところもあつたしね。歯がゆさを感じながらも、そこは耐えるしかなかった。この数年で、忍耐力ついたんじゃないかな、俺(笑)」

——待たざるを得ない状況が何度かあつたもね。

薫「そ。待つとか性分じゃないんだけど。利に関しては、待つしかなかった」

葵「利のことは信じられないほど本気なのよ、コイツ(紺と汝緒以外、全員笑)」

利「薫君ってそこまで押し超強い人なイメージはないから、そうなんだーって感じだけど……や、待ってもらってるのは、ほんとよくわかってたけどさ(申し訳なさそうに)」妖華「静かに、利を愛してくれる人っていう感じがします(少し俯いて。おおーっという声があがる)」

薫「いいね妖華ちゃん、もっといこうか(笑)」

利「ちよっと調子に乗らないでください」

桜「お前相変わらず怒る方向間違ってるよなあ」

哀「さすがにもう俺もわかりますよ、調子に乗って妖華ち

やんとか気安く呼ぶな、ということですよね利さん」

利・薫「そう(同時)」

皓「ユニゾン(笑)」

紺「けっ。何が静かに愛する、だ(そっぽを向いて肉を食う)」

薫「誰かさんがあまりに派手に愛するもんだから(ビールを飲む)」

紺「なんか文句あんのか！ 愛っっーのはそーゆーもんだろ！(ジョッキをダンと置く)」

全員「！(目を丸くして爆笑)」

桜「うーわ、愛を語り出した！(手で口を覆う)」

汝緒「……終わつた(横目で紺を見る)」

利「そんなに飲んでたかなあ……」

妖華「結構飲んでたよ」

紺「うるせえ、飲んでねえ！(目がすわっている)」

薫「だめだ、火をつけたら爆発するぞこの火炎瓶。俺の話は終わらせたほうがいいな」

——そのほうがよさそうだね(笑)。じゃあ薫にとって「絆は「待ち」って感じだったのかな。

薫「簡単に言えばそうな……いや、なんかそのまとめはなんか間違ってる気もするけど、まあいいや(笑)」

——また個別にゆっくり話を聞かせて貰うよ。紺のいないところで(笑)。

紺「ああ？」

——いえ、なんでもありません。

薫(笑)」

●「選ぶもんでもないだろ。色々ありすぎて……選ぶねえよ(汝緒)」

——さて、次は、汝緒だね。

汝緒「……別になんもねえよ」

桜「いきなり(一同笑)」

——たぶん一番楽しみにされてるよ、ここにいるメンバーから(笑)。

利「あ、そういうこと言うなよ……(筆者を睨み、小声で)」紺「へタクソ」

——……すみません。では、あらためて。

桜「ハハハ、ビクビクじゃん(一同笑)」

——ごほん。さて。汝緒も主役の一人だと思っただけど、どうでしたか。

汝緒「だから別にどうもこうもねえよ。主役になったつもりもねえし」

哀「取り付く島、なし！(笑)」

桜「がんばれー(笑)」

——……。印象に残ったシーンとかは？

汝緒「別にない(ビールを飲む)」

利「……ないの？(淋しそうに汝緒を見る。一同、うわあ、という顔)」

汝緒「……(利をちらりと見て、またビールを飲む)」

紺「利、泣け(ニヤニヤして利の耳に囁く)」

汝緒「お前はまだ飲み足りないのか？(鋭く紺を見る)」

紺「……。(顔を背ける)」

哀「(皓に顔を寄せ)……殺すってことだよな」

葵「殺すってことね(顔き)」

皓「……だな」

利「……汝緒、ほんとにないの？(まだ汝緒を見ている)」

薫「はいちよっと先に質問いいっすか(左手をあげて)」

——はい、薫どうしましたか。

薫「さつき葵は、利と陣さんのシーンを知っていたわけだけど、俺の場合は知らない体すか。それとも知っている体、どっちで行けばいいんですか(半目で筆者を睨む)」

哀「おお……怖いぞ……(両腕を抱く)」

利「……(硬直)」

——あ、あの……お好きなほうで……。

葵「世界平和のために知らない体で行きましょう」

薫「了解。いざとなったらこれを装備するからオーケー(筆者が用意したヘッドフォンを取り出す)」

皓「クイズ番組かよ(笑)」
汝緒「……別にそんな大したことは何もしてねえよ」
薫「へえ……(ヘッドフォンを首にかける)」
哀「これやばくねえか?(笑)」
利「帰りたい、帰りたいです」
薫「まーいいんだけど。初恋の相手は変えられないんだし(ため息交じりに)」
利「はっ……(むせる)」
葵「あらー、でも初恋は陣さんじゃないの?」
薫「ああ、元を辿ればそうか」
利「ちよちよ、ちよつと勝手に決めてかないでよ!」
桜「利って、罪なヤローだなあ(唐揚げを食べる)」
利「そんなまったり言わないでよ!(笑)」
——それで、汝緒の印象に残ったシーンは?
汝緒「……(黙る)」
薫「ヘッドフォンすぐできるようにしとくから、気にすんな」
汝緒「……(苦笑)」
利「えー、出てこないのかよお……」
——それじゃ逆に、利が汝緒とのシーンで印象に残ったのは?
利「ええ! 自分!？」
葵「確かにそれなら間違いないわね」

薫「お前はどの立場で喋ってんだ(笑)」
哀「歩く絆百科事典たる」
薫「ワイドショーのおばちゃんは大変だな」
葵「絆のことは何でも聞いてちょうだい(笑)」
利「じゃあどのシーンが印象でしたか?(笑)」
葵「そうね、あたしが利の気持ちで選ぶならー、やっぱりふたりで出かけた夜の川沿いランデブーじゃない?」
利「(全員笑) ランデブー!(爆笑)」
葵「間違いないでしょ?(笑)」
利「えーっ……」
葵「ね? 汝緒ちゃん」
汝緒「……忘れた(ビールを飲む)」
薫「……あんま泣かせるなよ(後に倒れ込む利を見る)」
哀「恋敵のフォロワーまでして、大変だなあ」
薫「やかましい(笑)」
葵「汝緒は記憶力ものすごい良いでしょ。こまかく色々覚えてるはずよオ(にやにやしてワインを飲む)」
汝緒「何も、いちいち語る必要もないだろ……」
利「じゃあ覚えてるの?(起き上がる)」
汝緒「……(横目で見て、視線を戻す)」
紺「……忘れるわけねえだろ利マニアの汝緒が(ぼそり)」
利「ぶっ!(全員爆笑)」
汝緒「おまえ、なあ……(脱力する)」

薫「全身のほくろの数とか知ってそうで怖いわ」
汝緒「ない(苦笑)」
紺「どつちの意味だ」
汝緒「は?」
桜「ほくるなんてないって意味だろさては!」
汝緒「……(苦笑)」
薫「……あーあ」
哀「ねえ、やっぱりこれヤバくねえか?(笑)」
妖華「利の血圧が下がりにすぎて死んじゃうよ、もうだめだよ(肩に顔を置く利を撫でる)」
桜「あ、ない、といえば! 復活ライブのときに、せーっかく利とも紺ともキスを振られたのに、汝緒やれよ(笑)」
汝緒「やんねえだろ」
葵「あーのライブは泣いたわねえ」
薫「保護者の涙が出たな」
哀「汝緒と言えば、ライブ前に利にいつも、震えてんじやねえぞって、あれでしょ?」
利「(顔を上げて激しく頷く)」
汝緒「……帰りたいくなるな確かに(呟く)」
薫「汝緒の気持ちはわかる。支えてやるから思い切りやれって、言っちゃりたくないんだよ」
葵「緊張したら、勿体ないもの、利は」
汝緒「小心者の怖い物知らず」

薫「わかる。気は強いけど自己評価は低い」
汝緒「そのせいですぐビビる(利を見て)」
利「……褒めてるのかけなしてるのか、本当にわかんないぞ(居心地悪そうに肩をすくめる)」
桜「一回、薫さんと汝緒でじっくり対談とかしてみたら愉しそっすね」
薫「多分、お互いに、そうそう、ばっかり言ってる気がするわ」
——じゃあ、汝緒にとってのベストシーンは、夜の川沿いというこどでいいかな?
汝緒「選ぶもんでもないだろ。色々ありすぎて……選べねえよ(煙草に火をつける)」
葵「(目頭を押さえて悶絶する)」
利「……(黙って笑む)」
薫「……よかつたな(片手頬杖で微笑む)」
哀「あ、本編に出てくる薫になったぞ(わかる、と方々から)」
利「穏やか優しい系の、すごい綺麗系の薫君だ」
薫「いや使い分けとかしてねえから(笑)」

☆ファンからのインタビュー①

——メンバーの半分くらいから簡単な感想を聞き終えたので、ここで一度、ファンから寄せられた質問に答えるコーナーを設けたいと思います。

利「どうぞー」

——ではまず一つ目。

哀「ジャラン！」

葵「ジングルが入った(笑)」

——利への質問！「薫の誕生日に何をプレゼントする？」

哀「ジャラン！」

葵「しっこい(笑)」

利「(笑)誕生日かあ……実はまともに誕生日祝いをしたことがないんだよねえ」

紺「愛されてねえな(笑って唐揚げを食べる)」

薫「お前はされたのかよ」

紺「……」

薫「愛されてねえな……可哀想に」

紺「ケツ」

利「誕生日とかさ、それどころじゃなかったじゃん。これまでだって、湯澤の人たちにしてあげただけで、メンバー

は誰の誕生日もお祝いできてないんだよ。みんなでわーっ
とパーティみたいなのはLSDでやったけど」

薫「だから今年はゆっくり誕生日祝いをしようっていうつもりでいるわけだ」

哀「そして質問は冒頭に戻る」

利「その誕生日に何をあげる？ ってことだよな」

桜「指輪？」

紺「ケツ！」

薫「(笑)利から指輪を貰うのか、それはそれでいいな」

利「毎朝俺のために味噌汁を作ってくれないか(低い声)」

哀「誰だよ(笑)」

利「プロポーズと言えば」

全員「古い(笑)」

利「じゃあ肩たたき券でもあげるよ」

薫「古典だな、どこまでも」

利「えー、陣は喜んでくれるよー？」

薫「いや陣さんは……また特殊っていうか……今貰っても喜びそうだしな……あの人は……」

哀「この夜景を君に捧げるよ」

葵「それ、この子の場合本当に何かしらの力でできちゃい

そうで怖いわ」

薫「権力的な何かか(笑)」

桜「いいなあヤクザ」

利「ちげーよ！(笑)……うーん、温泉旅行かなあ」

哀「あつ、何かもう、エロスのかおりが……(目眩を起す真似)」

利「ちよっとー(笑)」

汝緒「そろそろ泣くだろ(と紺を見る)」

紺「なんで泣かなきゃなんねえんだよ」

桜「元氣ないな(笑)」

利「あのねえ、変な意味じゃありませんから！ 本当にね、

薫君は気苦労が絶えなくてね——」

薫「当然原因はわかってるんだよね？」

利「……わかってますよ(笑)」

薫「あーよかった(笑)」

利「バンドの顔だしリーダーだし、このところあまり休みもないし。だからゆっくりと温泉にでも浸かって休んでほしいんだよね。その辺のスーパー銭湯みたいところじゃ刺青で入れないしさ」

薫「つまり貸し切りにしてくれんのかー、いいなあ」

葵「これは邪魔しに行くっきゃないわよねえ、……紺？」

紺「……なんで俺が」

桜「真剣に落ち込むなよ(笑)」

紺「違うつつてんだろー！」

妖華「紺の気持ちはわかる」

利「……それってどっちの意味？」

妖華「そんなの、薫さんに嫉妬してるに決まってるじゃない、とーし(微笑む)」

利「そう？ そうだよな、うん。(ふふふと笑って俯く)」

薫「俺って複雑な立場にいるなと我ながら思うわ」

葵「大変な恋人を手に入れたわね、ざまあみる(笑)」

薫「本当に気苦労が絶えませんよ。ま、来年の四月を楽しみにしとくわ」

——はい、では二つ目。薫への質問「彼女いますか？ と聞かれたらなんと答えますか？」

薫「これは……(額に手を置く)仕事とかファンに聞かれるときとかは、今はいい、って答えてるけど」

皓「んなわけねえだろこの野郎って思われても、それを貰

く」

薫「どういう意味だ(笑)」

哀「柔らかく言うと、このフェミニスト野郎って意味」

皓「このタラシってことだよ」

薫「お前から言いたいこと言いやがって」

妖華「薫さんほどのイケメンに彼女がいらないわけないって意味ですよ」

利「いちいち解説せんていいー！」

妖華「怒らないですよ(笑)」

薫「はいはい、妖華は利のものですよ、大丈夫ですよ(煙

草)

草を啜える)」

桜「今はいない、っていうのは無難でいいですねえ。俺いつも、いないよ、しか言えない。この商売そういうところ面倒ですからねー」

薫「そうそう」

桜「彼女いる、なんて言った日には、動員ゼロになるって、マジでありますから」

葵「ある程度固定がついて成熟していけばいいけど。はつきりと公言するには、ファンもメンバーも大人であるのが条件ね」

哀「若い子にとっては、メンバーは疑似恋愛相手だから」

葵「でもこの質問者の人が訊きたいのはそういうことじゃないでしょ？」

薫「多分。つまり、知人友人とかに尋ねられたときに、利のことをどう言うかってことだよな」

利「いないって言われても気にしないけどさ」

薫「いるにはいるって言うか、変な偏見がなくて信頼のおける人だったり、人として頭の良い人間には正直に言うこともある。相手によるってことだな(腕を組む)」

葵「どこからどう広まるかわからないから、慎重にはなるわね(薫頷く)」

桜「でも、利は俺のものだーって、主張したほうが楽なくさもあるんじゃないです？」

利「……はずかしいなあ(ちびちびとビールを飲む)」

薫「まあね。危なそうなヤツには、あえてわかるように態度に出したりする」

桜「たとえばどんなふうによ？」

薫「空気で牽制(笑)」

葵「してるしてる(笑)」

哀「怖い顔して利の傍に立ってたりー、さりげなく肩腰抱いて歩いてたりもする」

妖華「(紺にヘッドフォンを渡す)」

利「はは(笑)」

薫「それはイチヤイチャして二人の世界に入りたい、とかじゃなくて、安全策だから」

哀「指一本でも触れてみる、どうなるかわかってんだらうなー」

薫「ま、そういうこと(笑)。汝緒と紺は、わかると思うけど」

汝緒「……(視線だけで薫を見る)」

紺「(妖華にヘッドフォンをつけられているためにしかめっ面で無言)」

哀「妙なパートナーシップが生まれてるわけね」

葵「利親衛隊(笑)」

桜「それ冗談じゃなくて普通に本当にあつたことだからなあ……」

皓「今もそんなもんだらう」

薫「どこにいても護られる運命なんだよ。よかつたな(利を見て)」

利「うーん。まあ。ありがとうございます……(複雑そうに)」

葵「利はそうやって育てられちゃったのよ、陣さんに！(うつとりする)」

——では三つ目。葵への質問「美しさの秘訣は？」

哀「毎日村から美女をさらってきて、その生き血の風呂につかるのよ！」

葵「そのなの、十四歳までの娘のね！……って、ちょっと！

なんなのよ！」

桜「熟練のノリツッコミだ」

哀「でも葵お姉様、事実じゃありませんこと？」

葵「まあね？」

利「わかりにくいよ……やりかねないよ」

葵「国家が許可してるのよ、アタシの娘狩りは(スパーッと煙草吸う)」

桜「国、何許可してんだよ！」

薫「煙草吸ってるやつが美しさの秘訣とか、よく言うよ」

葵「ゴッホごほ……はあ、滅多に吸わないからむせちゃった」

皓「ビールおかわり(襖に向かって)」

葵「真剣にお答えするとね、とにかく夜はなるべくゴール

デンタイム、十時から二時に眠って、無農薬の野菜を食べ、オーガニックのワインを飲む、って感じかしらね。あとは

何より、気持ちね。どんなに忙しくても、エレガントな気持ち

持ちを忘れないようにするの。ヨーロッパの瀟洒な町並

みの写真を見たり、アロマを焚いたり、熱い紅茶をゆつくと飲む。淡ーい、アンバーな照明でね。もちろん、寝るときは上質のシルクかオーガニックコットンの部屋着。そうすればメタルでドーパミンバリバリの頭も落ち着いて、

自然と寝付きもよくなるものよ」

薫「そろそろ葵イズムとかいう本が出るな」

利「写真とエッセイで葵ちゃんの優雅な生活を追っただね(笑)」

哀「窓際に立って、アタシの一日の始まりは、太陽におはようって言うこと。そうすると太陽もちゃんと答えてくれるのよ」

皓「うぜえ(笑)」

妖華「太陽のイメージ、ないです」

薫「闇」

葵「酷いわね。さんと輝く太陽が似合うのは、この中じゃアタシくらいなものよ！(全員適当に頷く)とにかく美しいものばかりを見ることね。枯渇しないように、常に薪をくべなきゃだめ！もちろん、喫煙はNGよ！」

薫「へえ。ありがたいアドバイスだ(鍋の火加減を見る)」
——では四つ目。哀への質問「皓さんから、自分とは違う
香りが!! どうしますか?」
哀「おい皓、どっぴりうことだ」
皓「(面倒臭そうに笑う)」
利「哀ちゃんだけじゃなくて全員心配するよね……(全員
頷く)」
皓「俺は兄以外と関わるなと(笑)」
哀「別にそういうこと言ってるんじゃないんだけどさー。
でも、良い人できたら、誰よりも先に紹介しろよ(ワイン
を飲む)」
葵「(ニヤニヤして哀を見る)」
哀「なんだよー、その顔(眉間に皺を寄せろ)」
利「一応だーれも訊いたこと、ないんだよねえ……」
薫「一応、暗黙の了解でな」
皓「……なんだよお前たち(苦笑)」
桜「え? 付き合ってるんでしょ?(一同噴き出す)」
哀「ちがー! いやっ、お前っ、桜っ、わかってるの? 俺
と皓は、兄弟! きょうだい! だよ!」
桜「え? で?」
哀「で! って!」
利「赤いなあ……」
葵「赤いわねえ」

哀「何がだよ!」
全員「顔」
皓「言っておくけど、お前らが期待しているようなことは、
やってない」
哀「何答えてんだよ! バカ!」
利「期待してることって?」
哀「聞き返すな!」
桜「キスくらいはあるんでしょ? キスくらい(皓を見る)」
哀「オイ!(大声)」
皓「うるせえなあ(右耳の穴に指を入れる)」
哀「次に行け! 次に!」
薫「これ、まだこれ系の質問、来てる?」
——ある(笑)。
哀「いらねーよ!(大声)」
薫「じゃあ次行ってもいいか」
利「哀ちゃん、顔、髪よりピンク(笑)」
哀「次行け次!(ワイングラスを一気に空ける)」
葵「あーあ(笑)」
利「でも質問にちゃんと答えてないんじゃない?」
哀「……(考えて)だから。もし良い人できたんだったら、
俺に真っ先に知らせるって、そういうことだよ」
皓「はいはい(少し笑って頷く)」
薫「だいたい、別の人間の匂いがするって、必ずしも恋人

ってわけじゃないだろ……もうお前自分で墓穴、掘りまく
りだぞ(笑)」
哀「っ〜!(両手で顔をおさえる)」
利「友達という候補が存在しない(笑)」
葵「みんな容赦ないわねー(笑) アタシは黙ってたわよ。
何も言っていないわよ(笑)」
皓「いじりがいのある兄を持つと大変だ(煙草を吸う)」
哀「こんなん、まだあるのかよ……(脱力する)」
——ではとりあえず、哀のために次に行こうか(笑)。五
つ目。汝緒への質問。「ギターを始めたきっかけは?いつ
頃から弾いていたんですか?」
汝緒「……どうでもいいだろ」
利「もー、インタビュウにならないんだから協力しなよー」
哀「知りたーい」
葵「必死ね、哀(笑)」
哀「そういうわけじゃない、普通に汝緒のことが知りたい
んだよ俺は!(ワイングラスを置く)」
葵「まあそうでしょうけど(笑)。……そういうことにし
といてあげるわ(笑)」
紺「お袋のアコギつってなかったか?」
全員「ええー!(愉しそうにどよめく)」
利「すごい、みんなのテンションが高い(笑)」
汝緒「そんなの知って何が——」

利「楽しいんだよ!」
汝緒「……はあ、そうですね」
利「汝緒だって好きなギタリストの色々気になるでしょ?」
薫「真剣に諭されてる(笑)」
汝緒「……(しばらく黙る)……ガキの頃に母親がアコギ
弾いてのを見て。……これでもいいのかよ」
利「何、そのときに汝緒もちよつとは弾いたの?」
汝緒「弾かねえよ」
哀「良いインタビュアーがいるわー」
利「初めて弾いたのは?(身を乗り出す)」
汝緒「……小学生低学年に、爺さんの家にあったアコギを
弾いて、それからたまに弾くようになった(つまらなそう
に)」
利「それって……お爺さんへの当てつけみたいなものも、
入ってたの?(聞きづらそうに)」
汝緒「別に。そんなんじゃない……暇つぶしに弾いて、そ
のままなんとなく(諦めたため息)……もういいだろ」
桜「これ以上今はもう喋ってくれないな、こうなると」
利「汝緒マスターだなあ、桜は(眩いて箸を持つ)」
桜「それでお爺さんにエレキを買ってもらって、中学で俺
と知り合って、一緒にスタジオに入ったんだよな」
汝緒「(二度浅く頷く)」
利「あーもつと聞きたい……(箸で皿をつつく)」

薫「ほんつと汝緒ファンだなお前……」

利「だーってえ……」

薫「コイツ……まったく(ため息)」

葵「……薫はいつになったら完全勝利できるのかしらねえ
ー(笑)」

薫「うるせえ。(笑)」

——では六つ目。紺への質問「利に何かプレゼントするな
ら何を選ぶ?」

紺「あ? やらねーよ!」

利・葵・哀・妖華「ひっどーい」

桜「女形(笑)」

利「ちがーう!」

薫「お前こそ首にリボンつけて、俺を貰って、だる」

紺「ぶっ殺すぞ!」

利「あ、薫君に殺すはやめて(鋭い目をする)」

葵「いいじゃないのーもう、可哀想よ(紺の頭を撫でる)」

紺「手を払いのけ……うるせえ!」

薫「いいのいいの。少しも堪えないから大丈夫。それで?

何あげんの?」

紺「てめえにはどうでもいいことだろうが(ビール飲む)」

薫「聞かせるよ。敵情視察(腕を組む)」

桜「紺、よかったな! 恋敵として見てもらえて!」

紺「テメエ……なんだよ、まったく(箸で唐揚げを突き刺

す)」

薫「俺より利という時間長いんだから、お前のほうが把握
してんだろ?」

紺「……(黙る)」

桜「お前プレゼントとか考えたことねえから困ってんだろ
ー」

利「(顎に手を当て)……意外と紺は考えてる気がする」

汝緒「……あるな(半笑い)」

紺「甘ったれてんじゃねえぞ(利を睨んで)」

利「別に甘ったれてないよ(笑)」

哀「距離感がおかしー(笑)なんで今ちょっと保護者目線

みたいになってんの(笑)プレゼントを用意しててそれ

を当然と思ってる子供を叱る父、みたいな感じになってた

ー(全員笑)」

紺「……(再び黙る)」

葵「もう、可哀想なんだから、もっとやっちゃって!(笑)」

紺「……悪魔だな(横目で見る)」

葵「あら、そんな顔のあなたに言われたくないわよ(コン

パクトを出して鏡を覗き込む)」

皓「ほら、悪魔を召喚するぞ」

薫「悪魔が悪魔を召喚してどうするんだよ(笑)」

利「で? 何くれるの?(笑顔)」

紺「やらん」

利「で?(凄む)」

紺「少し怯んで、嫌な顔をする)……何がほしいんだよ

哀「負けるの早っ(紺に睨まれるが知らん顔)」

利「そんなの紺が考えてよ」

紺「……お前、金目の物ばっかじゃねえかよ(しかめ面)」

薫「やっぱりな(笑)」

利「ちよっと君たち人間き悪いなあ!」

紺「どうせたっかいブランドのアクセサリーとか、そんな

んだろ」

哀「ほうほう、それをあげたい、と」

桜「ひゅう〜(口で言)」

紺「バツ! そういうわけじゃねえ!」

利「くれてもいいよ(笑)」

葵「紺って、なんかほんとうに、繊細よね……すごく利の

ことを可愛く思ってる、愛してるのがわかる……(うつと

りと瞬き)」

哀「不器用な紺が不器用にネックレスとか利につけてあげ

ちゃう……」

哀・葵「ときめくわあ〜」

薫「おすぴー黙れ(笑)」

紺「なんっなんだよ!」

葵「見える、見えるわ……! クリスマスイルミネーショ

ンの下のふたりが……! ほら。やる。……フン、まあま

あ似合ってるじゃねえか(全員爆笑)」

哀「紺ってば。くすくす。ありがと。じゃあ、お礼……

…チュ!」(全員笑い転げる)」

利「~~~~! (妖華の膝の上に顔を伏せ笑い死にしかけて

いる)」

汝緒「(むせてる)」

桜「ひー! 汝緒が! 汝緒がすげえウケている!(さらに

全員爆笑)」

紺「あーっ! くっそうるせえめんどくせえ! なんなん

だコイツら! (ビールと叫ぶ。顔を隠して髪をぐしゃぐし

ゃ)」

葵「……あー笑った!(涙拭う)薫には悪いけど、ホント

いっちばん可愛いカップルよね、利と紺って」

薫「認めざるを得ないわ……あーあ。(笑)」

利「はーっ、よかったよー紺、薫君が許してくれたー(乱

れた髪を整え、涙拭う)」

紺「(無視して焼き鳥を食べる)」

利「だから次の誕生日とかにくれてもいいよ(笑)」

哀「うわー怖い! 利って怖い!」

薫「おねだりのプロ」

利「お礼にチュってするよー(笑)」

紺「こいつ……(半目で)」

葵「悪魔ばかりで困ったもんだわー(笑)」

——では七つ目。妖華への質問「利君とは双子のような存在、そして唯一「欲しい」と想って手にされた妖華さん・利君は誰にも渡さない?」

利「何この質問、照れる……」

妖華「(笑)」

紺「本気で照れるのいい加減にやめる」

葵「可愛いと思っちゃってるくせにー」

哀「くせにー」

紺「……(苛々と頭を搔く)」

妖華「……利のことは、誰にも渡したくないけど……もう、渡っちゃったよね……(と利を見て微笑む)」

利「違う! 違うでしょ妖華! なんてそういうこと言っ

の?(ハの字眉になる)」

葵「いつもみたいに、利は俺のものだよねって、言ってほ

しいのよね、利は」

桜「……すごい。姐御がいる」

薫「ボス(笑)」

妖華「……当たり前、利は俺の物って思うけど……でも、それはステージの上だけ、かな。……(首を振る)ステ

ージの上でも、利は俺のものじゃないの、わかってる」

利「……妖華(ぎゅうと妖華を抱きしめる。一同黙る)」

桜「妖華って、意外と、恐ろしく現実的。見てないふりする

んだけど、実はよく見てるんだよ。紺もな」

紺「……俺と妖華が似てるってことになんのかよ」

汝緒「……現実が誰よりもはっきりと見えている分、現実

から逃げる(前の壁を見て煙草を吸う)」

葵「リーダーはそんなふたりが、よく見えているのね(顔

いて微笑む)」

哀「というか、全員、見えるヤツ」なんだ、ここにいる

のって」

薫「だから時には、逃げ出したくもなる、ってわけだ」

哀「……逃げたことのないヤツなんて、いないんじゃない

か?」

葵「そんなに人間、できちゃいないのよ(煙を吐く)」

皓「逃げる方向を間違わなければ平気だろ」

利「……そう、だね(苦笑)」

薫「一番まずい方に行ったヤツが気まずそうだぞ(笑)」

葵「誰も人のこと言えないわよ、とくにアンタと汝緒と紺!

ほんっとめんどくさいわねー!(三人苦笑い)」

利「……妖華は、結局逃げ切れなくて、辛いんだね」

妖華「そうなのかな……?」

汝緒「逃げられないから、真っ先に崩壊する……それで他の

奴を崩壊させるより、マシンかもしれないけどな(煙草を

消す。一同黙る)」

利「どっちが正しいのか、わからないね。わからないから、

色々、間違っちゃったんだけど……」

紺「……(黙って手や指を見ている)」

葵「あのねえ。(肩肘をつく)いい? どちらも正しくは

ないの。崩れちゃだめなのよ。自分か他人を崩壊させる、

どっちかしか選択肢がないアンタたちのその脳みそ、共通

の欠陥ね。神様の設計ミスよ」

皓「辛辣(笑)」

葵「わかってるわよ、上手くできないことくらい。アタシ

だって難しい。……だからアタシたちは多分、ここに集ま

ってるのね。お互い、同じ課題を持った人間たちなのよ。

ジャンク品の寄せ集めなのよ!」

哀「なんか中二病患ってきた(笑)」

葵「いわば翼の折れたエンジェル!(一同爆笑)」

桜「うはー! それいい、それいいっすよ!(手を叩いて

爆笑)」

薫「ひでえ、こんな結論になるとは思わなかった(笑)」

哀「これは一曲歌わざるを得なくなってきたな、利(拳を

向ける)」

利「うーっ、つばさの……って、いいから!(笑)」

哀「続きは二次会のカラオケで!」

妖華「俺の質問から、まさかこんなところまで話が広がる

なんて……(笑)」

薫「ほんとだよ(笑)」

妖華「なんか、ちょっと元気になってきた」と言っって箸を

持つ)」

利「うん、よかった!(にこにこして見守る)」

紺「傲慢妖華が復活するか(プチトマトに焼き鳥の串を突

き刺す)」

妖華「(にやっとして紺のトマトを奪う)……そうする。

やっぱり、利は俺のものってことにする。(トマトを啜え

て、利の唇に乗せる)」

利「(目を丸くしてトマトを唇で受け取り、食べる)」

薫「まったく、かわいいねえ……うちの子たちは……(呆

れ顔で笑って右手で頬杖)」

——ではそろそろ、次に行っていいかな。一回目の最後の

質問。桜へ「まきまき&としとして活動予定はないです

か?」

利「ブーっ!(爆笑)」

桜「それー!?(爆笑)」

薫「出たよ、昭和の名曲歌ってそんなグループ名が(笑)」

紺「やるならお前らバンド脱けてやれよ」

利「やらないよ!(笑)」

桜「え? やらないの?」

利「え! やるの!?」

哀「お前ら筋通せよ、まずはリーダーにお伺い立ててか

らでしょー」

汝緒「……知らねえよ(笑)」

紺「オイ、調子に乗らせるとマジでやるぞコイツら」
利「やるって、何をだよー」

薫「ドラムとヴォーカルじゃあなあ……」

桜「ちよっとバカにしないでもらっていいすか！ かの有名な伝説的元祖ヴィジュアル系ロックバンドだって最初はドラムとヴォーカルで結成されてるんすよ！」

薫「出た(笑)」

利「そのトシじゃないんだからさあ(笑)」

葵「やっぱり意識してんの？ だからドラムの桜とバンド組んだの？(笑)」

利「違うよー、もー、たまたまだよお」

薫「じゃあやっぱり昭和歌謡曲を歌うわけか」

皓「グループサウンズ(笑)」

哀「でもどうせ、桜は歌下手だろ？」

桜「あっ、決めつけないでくださいよ！ 俺めっちゃカラオケ好きですからね！」

紺「意外と聞ける」

哀「へえー！ どんなの歌うの？」

利「自分はね、桜の往年のヴィジュアル系とか、好きだよ、いいよあれ(笑)」

汝緒「モノマネ一発芸じゃねえか(ビールを飲む)」

桜「俺にそれ以上求めるなよ。本職じゃえんだからよ(笑)」

薫「芸になってるなんて良いレベルじゃないか(笑)」

妖華「だけど利と桜だけなんて、まとまらなそうだね」
汝緒「まとまんねえな」

紺「ガツチャガツチャだ」

桜「酷い言われようだねー」

利「あえて、まきまき&としとし」でゴリゴリのヘヴィメタルとかやるのいいね」

薫「ギターヴォーカルとかやれば、お前」

葵「あっ、それ見てみたい！」

妖華「レコーディングとヘルプでベース弾くよ。汝緒と紺はいらなーい(舌を出す)」

紺「頼まれても行くか、そんなバンド！」

汝緒「見る分には最高に笑える」

利「笑う前提で来るんだな、このやるー(笑)」

汝緒「ギター、下手そうだな、お前(半笑い)」

利「つくー！ これは男のプライドを傷つけられたぞ！」

紺「男のプライド？ あったんだ、ンなもん(鼻で嗤う)」
利「うっわ！ チョーむかつく！ (両拳握る) てめえ、表出る！」

紺「やるか？ (ニヤニヤする。そのとき、パーンという音と歓声が隣室から聞こえてくる)」

葵「あ！ 年越しちゃったわよ！」

利「ええー！」

薫「なんつう年明けだ……」

哀「あけましておめでとうー！(笑)」

皓「今年も宜しく」

桜「よろしく！ (頭を下げる。おめでとう、よろしくの声が続く)」

利「陣、まだ来てないのに……(淋しそうに襖を見る)」

葵「嗚呼、利と陣さんの物語が始まるわよ……(手を組む)」

利「(笑)……あー……(肩を落とす)」

哀「一緒に新しい年を迎えたかった、一緒に新たな一歩を踏み出したかった、陣と……」

皓「アフレコするな」

——では、**年末反省会は終わり**ということ、**新年会として、去年の反省とこれからを語ってもらおうかな(笑)**

利「陣、早く来ないかな……」

薫「各所に挨拶があつて忙しいんじゃないのか」

葵「そんなに落ち込まないの、すぐ来てくれるわよ」

桜「薫さんに新年おめでとうのキスでもしてもらえば？」

ほら、よくマディソンスクエアとかどっかの中継でアメリカ人やってるだろ？」

薫「マディソンスクエアじゃなくて、タイムズスクエアーな(笑)」

桜「あ、そっか、そりゃライブとかやるところだ！ (手を叩いて笑う)」

葵「何にせよ、こんなところでやったら、相当ひんしゅく

ものよ(汝緒と紺の方を見て)」

薫「やらないやらない(笑)」

紺「勝手にすりゃいいじゃねえか(外を向く)」

汝緒「……だから天邪鬼って言われるんだよ、お前は(苦笑)」

妖華「じゃあ俺がキスする」

利「ほんと？」

妖華「うん、するよ。あけましておめでとう、今年も、よろしくね(利の唇に軽いキス)」

利「……どうしよう、幸せすぎる(はにかんで笑う)」

葵「アタシも！ (立ち上がってテーブルを回り込み、利の唇に口づける)」

哀「俺も！ (同じように反対から口づける)」

利「あははは！ ちよっとー！」

葵「ほら、持ってきてやったわよ！ (席に帰り際、薫の顎を掴んで軽く口づけて行く)」

薫「(不意打ちに愣き)……お前なあ(キスをして去って行く葵を見て)」

利「……(赤くなって俯く)」

妖華「紺、ヘッドフォンすれば？」

紺「見えるんじゃないよがねえだろ！ (全員爆笑)」

葵「アンタもすればいいのよ(にんまりとして頬杖)」

紺「……バカじゃねえの」

葵「あら、ライブではしたくせに？」
紺「……(舌打ち)」
桜「新年の挨拶だぞ。意識してるほうがおかしいぞ」
紺「オメエがおかしいだろ！」
薫「特別許してやるうか？(笑って片膝立てる)」
紺「(舌打ち) テメエの許可はいらねえよ」
利「本人無視かよ……(赤い額を押さえて)」
妖華「じゃあ、手にすれば？」
紺「(妖華を睨み、唐突に利の手を取る)」
利「えー！」
全員「おお！(歓声)」
紺「(右手親指付け根に噛み付く)」
利「痛い！」
葵「こら！(笑)」
利「いってえんだよ！(その手で紺の頭をひっぱたく)」
薫「お前、利に『痛い』しか言わせないだろ、ったく……」
汝緒「(立ち上がり、襖を開ける)」
哀「あ、汝緒が逃げるぞー！」
桜「逃げる気か！(汝緒を見上げて)」
紺「お前がやれー！」
汝緒「……便所だよ(苦笑)」
利「あーっもう、自分も行く(と立ち上がる)」
哀「わ、二人で何する気だ、新年の本気のキスか？」

皓「あい(頭叩く)」
利「そんなことしないよ！(赤くなる)」
葵「新年早々困った子ねえ？(ニヤニヤして薫を見る)」
薫「……(黙る)……良い。今日は許すって言ったから良い(腕組む)」
哀「いいのよー！」
利「ええい！ 違う！ もう！ いい！(ごすと座る)」
汝緒「……良くはねえだろ(小声で呟き去って行く)」
全員「……(一同唾然)」
哀「ちよちよ、ちよっと……今の、どういう意味」
利「……(頬を搔く)」
葵「薫に対して？ 利に対して？ どっちー？」
桜「薫さんに対して、だと思いたい……」
薫「苦笑してため息)……汝緒マスターのその言い方は逆ってことだろ」
桜「あー いや、……そういうつもりじゃないんですけど、でも……ああ、いやあ……(後頭部を搔いて)」
紺「……どっちもだろ(舌打ち)……あの野郎」
哀「何ー！ 何このスリリングな新年の幕開け！ 何このおもしろいもん見れる居酒屋！」
葵「どちらにせよ、利、帰ったら、また大変ね？(含み笑いで煙草に火をつける)」
利「……ちよ、そん、自分なんも……(俯いて視線で薫を

見る)」
薫「……まったく、大変な恋人を持ったよ、俺は(ため息)」
紺「いらねえなら返せ」
薫「おあいにく様(片眉上げる)」
利「もう耐えられないからやめて！(両手を振って顔を伏せる)」
皓「顔、赤っ」
葵「めでたい色だな」
哀「めでたいわね……あーあー、やってらんない(目を細めて煙吐く)」
葵「けしかけてはうんざりする、葵のそのドMは今年も健在だな(笑)」
葵「放っておいてちょうだい(フィルター噛む)」
汝緒「(襖を開けて戻ってく)」
桜「渦中の人が戻ってきたぞ(笑)」
利「バカ野郎！(額を押さえたまま叫ぶ)」
汝緒「(笑)」
紺「うっわ……(汝緒を見て目を開く。全員同じく)」
薫「これは説教だな」
利「なんでだよ！ なんもしてねえよ！(顔をあげる)」
薫「その顔。赤すぎ」
葵「やだー新年早々泥沼ア」
皓「なんて趣味だ(葵を横目で見る)」

薫「覚悟しとけよ(目が鋭い)」
利「だからなんもしてないだろー！(どんどん赤くなる)」
汝緒「……(煙草を吸い始める)」
哀「汝緒、やるなあ……」
紺「……ある意味テメエもドMだよ(横目で汝緒を睨む)」
妖華「……たしかに(薫と利を見て)」
汝緒「……(うまさうに煙草を吸う)」

(2へ続く)

二〇一四年一月一日